

宇喜多氏の戦国大名化

専攻 教科・領域教育学専攻
コース 社会系コース
学籍番号 M10149G
氏名 城嶋亮佑

1. 研究の目的

宇喜多氏は南備前を基盤として戦国大名に成長し、16世紀後半には宇喜多秀家が豊臣政権の五大老にも選抜されている。しかし、この宇喜多氏の素性は明らかになっておらず、一地方武士から戦国大名に成長していった過程については不明な部分がある。特に宇喜多直家以前は不明な点が多い。

その理由は、一次資料が乏しいことにあり、史実として確認できないことが多い。しかし、先行研究において、未だあまり注目されていない史料があることも事実である。このように限られた史料を、丁寧に検証することによって、宇喜多氏がどのように戦国大名と化したのかを明らかにしたい。

2. 論文構成

はじめに

第一章 宇喜多氏の勃興

第一節 宇喜多氏の出自

第二節 十五世紀後半の宇喜多氏

第三節 浦上氏と宇喜多能家

第二章 宇喜多直家の大名化

第一節 弘治～永禄期の浦上氏と宇喜多直家

第二節 宇喜多直家の大名化

おわりに

3. 研究の概要

第一章第一節では、宇喜多氏の出自について検討を行った。ここでは、「宇喜多能家画像賛」に注目し、内容を細かく検討した結果、宇喜多氏の出自を百済の王子とする説は賛の著者九峰の脚色であることを明らかにした。

次に第二節では15世紀後半の宇喜多氏について、文書に見える宇喜多氏についての検討を行った。まず、「宇喜多」の名が最初に確認できる宇喜多宝昌について検討し、宝昌は金岡東荘を中心に名主職などを持っていたことなどを確認した。吉井川下流域に勢力を持っていたことを確認した。また、宗家は、宗家に関しては、赤松氏在京奉行人→赤松氏在国奉行人→嶋村秀久→宇喜多宗家という命令下達系統が確認でき、浦上村宗の偏諱から、実質的には浦上氏の被官だということを指摘した。最後に宇喜多久家は、難波氏のような地域小領主から頼られる存在で、赤松家中においてかなりの発言があったということを指摘した。

第二節においては15世紀後半の宇喜多氏について、史料に見える人物を見た結果、そこで所見のあった五郎右衛門入道沙弥宝昌、修理進宗家、蔵人佐久家、二郎三郎の4人の系譜関係は不明で、赤松氏の支配機構の末端に位置づけられていた宗家が惣領らしいということが推測されるだけであった。

第三節では、宇喜多氏で初めて惣領と確認できる能家について検討を行った。その結果、宇喜多

能家は吉井川下流域を中心に名主職など、本来百姓がもっている所職を買得しながら、浦上則宗、村宗の2代にわたってその被官として働き、宇喜多一族の長として台頭していたことを指摘した。能家が出家する頃には、難波クラスの国人から領地紛争の解決を期待されていた。それは知行分の中の瑞泉寺分という地域は限定的ではあるが、発言権があったと指摘した。

第二章では、宇喜多直家について考察した。まず第一節では、浦上氏と宇喜多氏が決別する前の時期にあたる弘治～永禄期の浦上氏と宇喜多直家の関係と、直家の権力形成について検討を行った。その結果、浦上氏の被官であった馬場氏を自己の被官とするなど、浦上氏から自立する兆しにあったことを指摘した。

最後に第二節では、直家が浦上氏から決別し、その後、織田氏、そして、かつて同盟を結んでいた毛利氏との攻防から、宇喜多氏がどのような過程をたどって戦国大名と化したのか検討を行った。直家は永禄末期上洛を果たした信長に接触を試みたようであるが、その後は信長と同盟関係にある毛利氏と備中・備前で戦った。このとき浦上氏も毛利氏と戦ったが、浦上氏と直家が同盟関係にあったわけではなく、毛利・浦上・宇喜多の三氏は相互に対立をするという複雑な対立関係にあった。しかし、元亀3年(1572)足利義昭や信長が三者の和睦を勧め、同年6月直家が義昭に毛利との和睦を申し出て、毛利氏も10月義昭・信長の勧告に従い、ここに「三和」が成立した。しかし、毛利氏の浦上・宇喜多両氏、特に浦上氏への不信感は強かった。そのような中で、直家は天正2年(1574)3月、浦上氏と決別し、翌3年には浦

上氏の拠城天神山城を落とし、宗景を播磨へ駆逐した。ここに直家は南備前を治める戦国大名と化したのである。その後、天正4年毛利氏と共に信長陣営を離脱して本願寺支援に回り、毛利領と信長領の境界、西播磨で、毛利軍の先兵として信長方国人らと戦うが、天正7年、再び毛利方を離れて、信長方に帰順した。このあと直家の子秀家が豊臣大名として躍進していくが、それについては今後の課題としたい。

主任指導教員 河村昭一

指導教員 河村昭一